

東日本大震災および原発事故による福島県外への避難の実態 (IV)

—避難終了世帯調査の結果および秋田県と岡山県の避難者の比較—

蔭山 佐智子・佐藤 修司

The actual conditions of people who evacuated outside the Fukushima prefecture after Great East Japan earthquake and Nuclear power plant accidents (IV)

-On the interview with households which have returned home and the comparison between the refugee to Akita and Okayama-

KAGEYAMA, Sachiko; SATOH, Shuji

Abstract

This article is a part of the report of the investigation for people who independently evacuated to Akita by the nuclear plant accident after the East Japan great earthquake disaster. Five years or more have passed since refuge, the returning people are increasing in Fukushima and neighboring prefectures including Miyagi. We clarified the situations, factors and reasons of their return by the hearing investigation. In addition, we clarified common and different points between people who evacuated to Akita and Okayama by comparing our findings with the other researches about refugee to Okayama. Although they had many common reasons and so on, health damage and uneasiness was more important in the case of Okayama.

キーワード：：東日本大震災，原発事故，避難世帯，福島県，秋田県，岡山県

Key words : Great East Japan earthquake, Nuclear power plant accidents people in evacuation, Fukushima prefecture, Akita prefecture, Okayama prefecture

1. はじめに—問題の所在と本稿の目的

東日本大震災および原発事故から5年半が経過したが(本稿執筆時点)、福島県外への避難を継続する世帯はまだ存在する。ここ秋田県にも福島県から避難してきた人々が今も生活している。

紺野・佐藤修(2014)では、秋田県における自主避難世帯、特に母子での避難生活を送っている世帯の母親にインタビュー調査を行った。その結果、秋田県内で避難生活を送っている母親と子どもたちの実態の一端を報告することができた。またそれを受けた紺野(2015)では、自主避難する母子を福島県内で生活を続けながら支援する父親にインタビュー調査を行い、その実像に迫った。続く蔭山・佐藤修(2016)では、秋田県で自主避難を継続する世帯と避難元もしくは近隣県に帰還することを選択した世帯の母親に聞き取り調査を行った。その結果、避難を継続している者と避難を終了した者との両方の意見を織り交ぜながら、秋田県での避難生活の実態に迫ることができた。

本稿では、まず、前回、紙幅の関係上掲載できなかつ

た聞き取り調査の結果について報告する(Ⅰ)。次に、避難先として岡山県を選んだ避難者がどのような生活を送っているかについて、岡山県へ避難した世帯の意見を分析し秋田県での避難生活と比較することによって、秋田県と岡山県に避難した世帯に共通する点や異なる点は何かを考察したい(Ⅱ)。そのことによって、想定外と言われる事態が発生した時に人々はどのように行動するのか、そして未来はどうなるのかを模索するためのデータを積み上げたいと考える。原発事故の発生を受け、集団ではなく個人が自律性をいかに獲得するのか、避難した世帯がどのように生活を立て直していくのか。本稿が困難や悩みを抱えながらも懸命に生活する自主避難者世帯の様子を捉えた記録の一部となれば幸いである。

1. 聞き取り調査の報告

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

前稿では秋田県で避難生活を送る世帯と避難生活を終えて避難元等に戻る決断をした世帯の両方に聞き取り

調査を行った。そして、避難継続世帯と避難終了世帯の両方の意見を織り交ぜながら検討する中で、放射能災害発生時の状況と避難開始までの様子、なぜ秋田を避難先に選んだのか、避難後の子どもの様子、福島と秋田の教育の違い、故郷の人々との関係、避難生活を成功させた要因、県や国への要望は何かについて明らかにすることができた。

今回は、主に避難生活を終了した世帯の実際について報告する。具体的には、秋田から現在の場所へ移動するまでの心境等の変化、現在の子どもの様子、現在の場所の教育について、現在の場所の人との関係、帰還または移住が成功した要因について、である。また、避難継続世帯と避難終了世帯のそれぞれに、避難生活を経て自分はどう変わったと感じているかについて尋ねたことも合わせて報告する。

(2) 調査の方法

調査の方法については蔭山・佐藤修(2016)を参照されたい。

2. インタビュー記録に基づく考察

(1) 前稿のインタビュー記録に基づく考察の要旨

被調査者ら全員の意見を織り交ぜながら考察してきた結果、2011年3月12日の原発事故発生を受け、被調査者達が放射能に対する大きな恐怖心を抱いたこと、当時の学校の運営も正常ではなかったこと、国の発表だけでなく、テレビやインターネットの情報、自身での調査等も根拠にして自分達で自主避難を決断したことが見えてきた。福島県から遠く離れた秋田県を移動先に選んだ理由は、放射能汚染の心配が少ないこと、文化面や経済面でも生活していく自信が持てる場所だったこと、行政の支援の内容、などが挙げられた。気候の違いについて不安の声はあまり聞かれなかったが、母子避難を選択せざるを得ない世帯では父親や祖父母の気持ちにも配慮し、行き来できる範囲内ということで秋田県を選択した側面もあった。

避難決定後、両親や祖父母のいる安定した家庭環境を離れて秋田県で過ごすことになった子ども達であるが、順調に秋田県の学校に通っている様子が明らかになった。しかし、家庭内では反抗的な態度を見せる子がいるなど、子どもの成長に伴い苦労している一面も浮かび上がった。福島県と秋田県の教育の違いについては、震災当時、放射能の影響で正常な運営ができなかった福島県の学校の対応を「淡々とした」「冷たい」と表現する意見があった。受入側の秋田県については、子どもと親と両方に対するフォローが充実しており、安心して学校生活に馴染むことができた様子が伺えた。秋田県の家庭学習の効果については肯定的な意見が多かったが、一生懸命な指導に戸惑う子どももいたようだ。幼児保育・教育の

面では、母親の子育てに対する考え方やライフスタイルに合ったサービスを提供する園に対して満足を感じている様子だった。故郷の人との関係については、どの被調査者においても多少なりとも問題があることが明らかになった。

しかし、そうした問題があっても避難生活を続け立派に子育てをしている要因として、経済面の問題を自ら解決していること、避難元に住む家族の理解と援助、子ども達が新しい環境に溶け込んだことで母親も新たな人間関係を構築できたこと、見知らぬ土地での生活をサポートする秋田県による支援、インターネットの存在、母親の明るく前向きな生活態度等が考えられる。

県や国への主な要望としては、まだまだ震災の傷跡が深く支援が必要な人もいるから見守りを続けてほしいという声や、放射能漏れが続く原発に対して安全性を強調する行政側に不信感を抱く声が聞かれた。

(2) 秋田から現在の場所へ移動するまでの心境等の変化

ここからは、2015年3～4月にかけて秋田県から避難元もしくは近隣県に引っ越した世帯の証言が中心になるが、秋田県に避難を続ける世帯であっても帰還等へ向けて揺れ動く心境が語られたため、両者の意見を取り入れつつ検討する。

まず、筆者が被調査者らにいつ頃まで秋田県に滞在するつもりか聞いたところ、「どうでしょうね。本当に、口には出さないけれども、そこです。今の悩み。目下の。私の。決断しなければいけない、見越さなければいけないところは。」(秋田)と話したのは、中学二年生にまで成長した子どもを持つ母親である。せっかく馴染んだ秋田県の高校に子どもを進学させたいが、避難元に残る夫とのこれからの生活も検討すると自分の考えだけでは簡単に結論が出せない。また、高校進学ばかりではなく中学校進学の時期でどうするか迷っている世帯もある。「いろんな話聞くと、やっぱり中学校で転校すること自体大変だし、あと入試のこともすごく大変だっってすごく聞くので、うん、タイミングいい時とすれば、そのやっば(中学校に)上がる時」(秋田)だと考えて、小学校5年生の子どもが中学校に進学する時に秋田を引き揚げることを検討していた。

実際に帰還を果たした世帯では「借上げ住宅との兼ね合いもあったんだけど…(中略)…いつまでもそのままには多分無理だなあって思って。…(中略)…主人なんかもねえ、きっと許さないだろうし。…(中略)…中学校になったら一区切りかなあ…(中略)…とっていたところにお義母さんが具合悪いからって」(他県)なって、子どもが小学校5年生に進級する時に避難元に戻った。この世帯が帰還した主なきっかけは義母の病気だが、自主避難者に対する借上げ住宅の提供期間が平成29年3

月31日で終了することにより経済的負担が増えることや子どもの進学タイミングといった要因も、避難者が帰還または近隣県への移住を考える根拠になっているようだ。近隣県に移住した世帯が秋田を引き揚げたきっかけは、父親の仕事の関係だった。社員の家庭状況に配慮した会社側が、避難元ではない近隣県でも父親が仕事できるように取り計らってくれたのである。その背後には「『私は福島には帰らない』ってはっきり、『帰りたくない、住みたくない』(他県)と主張し続けた母親の意志があった。やはり震災時に抱いた放射能への恐怖やその時の社会の混乱ぶりの印象が強く、避難元に帰る気持ちにはなりにくかったことが想像できる。同じような考えから、子ども達が進学の時期を迎えることになっても「やっぱり自分の心の奥底では秋田で。…(中略)…秋田で育てていこうと思ってます」(秋田)と打ち明ける母親もいた。

さて、近隣県に移住することもなく避難元に戻った世帯は、どのようにして避難因の大元である放射能と折り合いをつけたのであろうか。秋田県に来てせっかく放射能の被害から遠ざかることができたのに、なぜまたその紛争因に近づいていくのか、という疑問に対する答えの一つは時間の経過であった。避難元への帰還を果たした世帯は「セシウムとかもさ、だんだんね、半減期とかになってこう、全然足りないけど、それでもこう、下がるので、もうこれでいやだって言ったら、福島にあと一生帰れないなあと思って」(他県)と、放射性物質の影響を自分なりに調べて時間の経過により放射線量も下がったことを確認した上で何とか折り合いをつけた。さらに、時間の経過により放射能に対する自分の意識が変化しつつある世帯は他にもある。「一年に2回ずつ毎年帰ってたので、何か、それ、最初は思ってたんですけども、もう何か住んでる人は住んでる人なりの、もう、やり方っていうか、やってるんだなあっていうのも思うので。私もまあ、そこに入って、混ざって、帰れば同じくせざるを得ないでしょうし、そうやっていくのかなあ」(秋田)と答えた母親は以前同じ質問に対し「私は嫌ですけど、今はまだ、もうちょっと嫌ですけど」(秋田)と語っていたのだから、時間の経過に伴って意識が少しずつ変化することがあり得ることが分かる。また、筆者の疑問に対するもう一つの答えは「本来なら離れていれば本当いいんでしょうけれども、ちょっと、うーん、私も自信がないですね。秋田でもし親戚いなくて、親はまだ若いので大丈夫かなとは思いますが、なんかいろいろ考えると、ちょっと不安なので、まあ1時間ぐらいで行き来できるんだったら、距離とかだったらいいのかなっていう感じですね」(秋田)ということで、放射能の影響も心配だがそれよりも今後の自分や家族の行く末の方が気がかりであることも明らかになった。

(3) 現在の子どもの様子

現在の所に移動して子どもに何か変化があったか尋ねると「あんまり変わらないの。…(中略)…(秋田で過ごしている間は)放射能のこと口うるさく言わなかったじゃない?だからあんまりそういうのに関して、逆に疎いっていうか、そういうのもあるのかなあって思うんだけど。帰ってきてから、あともう周りも全然普通だし。」(他県)と語ったのは避難元に戻った母親である。母親は「ニュースでよく、汚染水が漏れたと報じてるのに、その一方で魚の販売に矛盾を感じる。その他のニュースもそうだ。全て見ていると又、避難したくなるので最低限の情報しか聞いてない。…(中略)…避難せずにいたママ友達は、こんな思いで過ごしていたのだろうと思うと、秋田で食べ物の心配もなく過ごしていた私達は幸せだった」(母親の手記)と感じ、帰還後の生活に不安を抱くこともあるそうだが、子どもはすぐに学校に馴染んで友達とも仲が良く、心配していた仲間はずれにされることもないという。だが、小学5年生ということもあって子ども達の間にはすでにグループができており、「本当にこの子とペアで、すごい仲いいっていう友達ができなくて。何かそれがちょっと、ね、親としても、こう『可哀そうなことしたなあ』って、あっちではすごく仲のいい友達がね、一人いたのに。で、手紙なんか今でも寄こしてくれて、いつもなんか手紙の最後に『大好きだよ』って『いつまでも友達でいようね』って必ず書いてきてくれるのね。それとか見ると、やっぱそこまでの友達はこっちではまだできていない」(他県)そうで、子ども本人も「秋田に帰りたいなあ」と漏らすこともあるという。

近隣県に移住した子どもは、ちょうど小学校に入学する時期であった。引っ越したアパートに偶然4月に転入してきた同級生がおり、入学式の次の日には一緒に登校するようになった。またその他にも転校してきた子がいて仲良くなり、学校生活にはすんなりと馴染んだようだ。近所の公園には上級生が集まってドッジボール、リレー、鬼ごっこなどをして遊び、下級生のことも誘ってくれる。「急に大人になったっていうか、私からしたら。何か前はあんなに『お母さん、お母さん』だったのに、ランドセル置いて、宿題プリント毎日1枚出んですけど、やって、『音読するから聞いて』とか言って、音読ばーってやって、公園に走って、5時までびっちり遊べます。」(他県)と、逆に母親が寂しさを感じるぐらいである。また、自然豊かな秋田県で幼児期を過ごしたせいもあって「『はっば赤くなったね』とか『風が冷たいね』とかこっちに来ても言うんですよ、何かこう季節の変化とか。…(中略)…そういうのって秋田にいたからだなあ」(他県)と、放射能を気にすることなくのびのびと遊んでいた秋田で

の暮らしを振り返っていた。

二つの事例は移動した場所も子どもの性別や年齢も異なるが、両者ともその地域の小学校に馴染み、友達もできて元気に過ごしている様子が伺える。母親の心境としては個々に複雑な部分もあるが、秋田県で過ごした数年間子ども達の成長にとってはとても有意義であったことが伝わってきた。

(4) 現在の場所の教育について

現在の場所で子ども達が通う小学校の様子について、秋田県の場合と比較しながら話してもらった。

避難元に帰還した子は「秋田の学校は楽しかったなあ」(母親の手記)と時々言うそうだ。現在の学校が特別悪いわけではないが、真面目すぎてお笑いの部分が少ないと感じることもあるからだ。今の学校の規模の大きさも原因の一つかもしれないが、保護者の目から見ても秋田の先生の方が子ども一人一人に接してくれてアットホームな感じがしたそうだ。親への対応が事務的な印象を受ける現在の学校に比べ、秋田の学校は自主学習のコメントやお便りなどを通して親とのコミュニケーションを積極的に図っていたし、子どもの姿を通して学校で今何をやっているかがよく見えたと言う。今の学校の先生に秋田の自主学習について話すと、「正直、私達もそこまで目が届けばね、一番理想だとは思うんですけども…(中略)…(勉強の)習慣がついてなくて、やっとやっとなの子がたくさんいるんだ…(中略)…勉強の習慣をつける。そこに目標を置いているから、中味までは(無理させられない)」(他県)との返答があり、宿題も問題数の少ないあっさりした内容のプリントが出され続けているそうだ。子どもと一緒に親も採点されていると思うほど家庭学習に熱心に取り組んでいた秋田県と比べると、物足りない印象を感じている様子が伝わってきた。同様に「力をつけるとか、そういう感じじゃないの。宿題という義務でやってるみたいな感じのプリントっていう印象です」(他県)というコメントが他県に移動した世帯からもあった。その代わりなのか、その地域では通信教育や塾、習い事等に力を入れている家庭が多いとも聞いた。

まだ帰還や移住をしてから長い時間が経過していないため、現在の学校の取り組みの良さが見えてこない部分もあるかもしれないが、両者とも秋田県の丁寧で徹底した取り組みに対して好意的な意見を寄せていた。

(5) 現在の場所の人との関係

県外に避難した世帯が避難元に帰還した場合「『避難=逃げた』という負い目もあるし、避難していたことに対する周りの目が気になる」(toiro, 2015:1)という意見があるそうだが、実際はどうなのだろうか。避難元と近隣県に移動した二例からその実態の一部を検討してみ

たい。

避難元に戻った世帯から聞き取り調査終了後受け取った母親の手記の中には「家族はもちろん友人達も近所の方も温かく迎え入れてくれて、人間関係で困る事はなかった。主人との気まずい空気もすっかりなくなり、震災前の家庭生活に戻った」とある。聞き取り調査の中では、「周りのね、ママ友とかもね…(中略)…嫌な感じで受け入れとかがなくて…(中略)…初めて参観日行った時とかは…(中略)…知ってるお母さん達は声かけてきてくれて。『あ、帰って来たの?』って言って声掛けてもらって。ね、全然もっとう、無視されたりするかと思ったんだけど…(中略)…最初の参観日の時はどきどきした」(他県)と、当人の予想とは反対に友人達から温かく迎え入れてもらった様子が語られた。また、家族との関係では「避難する前は全然なんかあんまり仲良くなかったんだけど、今はお義母さん達もまあ病気だとか、あと帰ってきて嬉しいっていうのもあるんだろうけど、前よりは全然やっぱ、表面的な、あの、関係はとても良好なのね」「自分が実家の方の、やっぱねえ、母とか父とかにもやっぱ感謝っていうかね。ちょっと離れたから申し訳なかったなあって言う気持ちもあって。やっぱね、孫が成長すんの見せられなかったからね」(他県)というように、震災前以上に良好な関係を築いているようだ。避難生活後半に少々気まずい関係になってしまった夫は、現地産の食べ物に抵抗を感じていることを言い出しにくい嫁に代わって「うちでは好きじゃないし、喜ばないから寄こさないで」(他県)と姑に言ってくれるほどの気遣いを見せるそうだ。しかし、周囲との人間関係が良好な背景には母親の周囲への気遣いもあることが語られた。「避難の話は自分からは一切言わないから…(中略)…娘もほらね、『学校ではそういう話しない』って。『私、はぶられるから』って。最初に娘からもこう釘刺されたでしょ?だから…(中略)…極端な話『なんで運動会やるんだ』とかさ、そういう、『なんでプール入れるんだ』とかさ、ちょっと言えないじゃない?言ったらきっと『変わり者だ』って言われるだろうっていうのは自分で分かってるから、そういうことはもう封印してるっていうか、本当は言いたいんだけどもやっぱ言えない雰囲気はあるよね。誰もそういう話はしないから。」(他県)

一方、同じ時期に近隣県への移住を果たした世帯では「特に『自分が避難しました』とかがしゃべる場もないから、震災に関連して何かそういう嫌な思いをしたとかいうのはないですね。言ったとしても多分ないと思います」(他県)と語り、新天地での生活を「こっからまたスタートっていう感じ」(他県)と表現した。子どもが通う小学校の児童が年間3分の1ぐらい入れ替わる

ほど転勤の多い地区に住んでいるということもあり、新しい人間関係を構築する苦勞についても特段悩むことはなく、子どもの友人を通して親同士の輪も広がっているようだ。また、近くに肉親が住んでいるので、夫が仕事で帰って来られない時があってもお互いに助け合えるという心強さもあるそうだ。避難元に帰還しなかったことで夫の両親から嫌味などを言われることはないが、「私の実家の父に『たまには福島に行って、ちゃんと孫の顔見せに行け』(他県)とアドバイスされるそうだ。以上のように、今回の事例では想像以上に人間関係がスムーズであった。

(6) 帰還または移住が成功した要因

「自主避難生活がおおむね順調に推移していること」をもって避難生活の成功としたこと(紺野・佐藤修2014)に倣い、「帰還または移住後の生活がおおむね順調に推移していること」を帰還または移住の成功と定義すれば、この2つの事例は成功していると言えるのかもしれない。まだ避難終了から時間が浅いため今後の推移を見る必要はあるだろうが、聞き取り調査を通していくつか二例に共通する成功要因が見えてきた。

一つめは、帰還もしくは移住前に今後の生活の在り方について自分の中で十分に検討を重ねた末に行動に移していることだ。まだ秋田で生活している世帯が「実際問題、『(カウンセラーに)相談してお母さん何解決したの?』って(自分の子どもに)言われて。帰るか帰らないかの問題しか考えてないんですね、今。だから『その問題ってお父さんとお母さんの問題なんだから、他の人に相談してどうするの?』って言われると確かにそうだよなあって思って。まあ、話したから楽になるっていうのはあるかもしれないですけど、まあ、そういう時期ではないなあ(秋田)と語っているように、決断に至るまでには夫婦間や家族間で苦しい葛藤の時期や話し合いの過程を乗り越える必要もあるのだろう。事実、「(夫と)何度も話し合いをしたがお互いに気まづくなるばかりで、納得する答えではなかった。結婚してからケンカはほとんどした事がなかったので本当に辛く疲れた。娘とも話し合いをして、年度変わりならクラス替えもあるし、学校にも馴染み易いということで福島に戻る事にした(母親の手記)、「離れて暮らしてて、会いにもなかなか来ないし…(中略)…本当に私離婚して秋田に住もうって思ってた時期も、思いながらもずっと過ごしてたんですけど、でも離婚するにしても1回一緒に住んでみると、分かんないなあと思って、もしかしたらやっぱりうまくいくとかっていうこともなくはないし、ま、離婚するんだったら離婚するで決定的な何かがある、その、一緒に住めばあるかもしれないからと、まず何かしないと始まらないと思って」(他県)のように、避難を終了した

世帯でも決断に至るまでには当事者同士でしか解決できない大きな葛藤が存在していた。

二つめの成功要因として考えられるのは、周囲に頼りにできる肉親や友人等がいたことである。また、注目したい点は秋田に避難してもその相手と良好な関係を築いていたことである。そのため、いざ帰還や移住の時期を迎えても、生活する上で頼れる相手が存在していたと考えられる。

三つめに考えられる成功要因は、子ども達がすなりと新しい環境に馴染んだことである。二例とも子ども達が見知りをしていない性質で、また子ども達を受け入れた小学校の規模が大きく、転勤者が多い地区であるという特徴も共通していた。そのため、子ども同士のつながりを通じた親同士の輪が広がり、固定化された人間関係に疎外感を感じることも少なく、新しい環境に溶け込みやすかったのかもしれない。

最後の要因は、周囲への気遣いも含んだ母親の行動傾向であろう。両者からは共通して明るく前向きに生活している様子が感じられた。しかし、避難元に帰還した母親は「戻ってからの2ヶ月位は、精神状態がとても悪く、体調も壊し寝込んでばかりの日々が続いた(母親の手記)と、引っ越しの疲れや戻ってきてしまった事への辛い気持ちがあったことを打ち明けた。筆者が聞き取り調査を行ったのは11月だったためすでに生活は落ち着いていたが、現在の明るく前向きな姿を取り戻すまでには当事者にしか分からない苦勞があっただろうと察した。

(7) 避難生活を経て自分はどう変わったと感じているか

近隣県に移住した世帯や避難元に帰還した世帯は、秋田にいた頃は今後の生活が全く決まっていなかったが、避難を終了したことでその気持ちが解消されたと言い、「普通の家族の生活や、今後の生活設計が出来る事は、こんなにも心が軽くなる事だとは思っていなかった(母親の手記)、「震災のこととか、避難生活のこととか、これからのこととかって、考えなくなったっていうか、ま、一応軌道に乗ったなあっていう感じがあります。先が見えたっていうか、何て言うんですかね、バーって霧が晴れるような感じ。すっきりしてます、すごく」(他県)と、まとめている。

現在も秋田県に残る世帯では、「『やればできるもんだなあ』って。…(中略)…どこまでできるのかなあって思いましたけど。…(中略)…何事もなく過ごしているから結果見て言えることなんですけど。うん、結構あとは、子ども達がすごくこう、協力してくれる、我慢してるのかなあって思う部分はありますけど。今までしてた生活っていうのを『今まではこうだったのに』っていう

ことではなくて『ここではこうだね、こうだね』って前向きに考えられるようになってったのも、ああ、こっち来たからかなあって思ったりして。」(秋田)、「確かに二重生活で大変ではあったんですけども、…(中略)…いいこともすごくあって、それが、まあ、震災でこういうふうにはなっただけでも、まあ、生活としてこういうことを経験できたことは良かったなと私は思っています。ま、そのまま福島に居れば主人と一緒に住めて、家族皆で住めたんですけども、ま、こっちはこっちで、それなりにきちんと生活を考えて、やっていけなければ私が働けばいいっていう考えで来てたので。それは、お金が無くなったら働くっていう基本があれば、まあ、いろいろ、そうですね、所変わっても生活はしていけるものだなんて思っています」(秋田)、「成長したとういか、成長なんでしょうね、これも。何かいろんなことを、ある意味まあちょっと落ち着いては考えられる、ま、時間が経ったからなんでしょうけれども。何か、いろんな人がいて、いろんな考えがあって、それでいいな」(秋田)と話していた。

II. 岡山県との比較

1. 比較資料の概要

(1) 資料選択の理由

秋田県の避難者の生活と比較するために他県の避難者の生活を綴った資料を探したところ、「福島から岡山へ原発事故から5年目のいま」という冊子を入手することができた。その冊子の内容を精読した結果、本稿で行った調査時期や手法と類似点が多いことが判明し、秋田県と岡山県の避難者の生活実態を比較・検討しやすいとの判断に至った。

(2) 調査の方法

岡山県での聞き取り対象者には次のような特徴があり、秋田県へ避難した世帯との類似点が見られた。①東京電力福島第一原発事故の影響を逃れるべく避難していること、②原発事故以前は福島県内に居住しており、現在岡山県で定住的に(短期保養目的ではない)避難生活を送っていること、③避難指定区域ではない地域からの自主避難であること、④学齢期の子どもを持つ世帯であること、以上の4つの条件を満たす岡山県在住の母親の話が多く掲載されていた。

岡山県での聞き取り調査は、平成27年9月から12月にわたって行われており、秋田県で行った調査時期と重なっていた。調査人数は37名であり、秋田県での調査と比べると約7倍の人数になるが、スタッフ2名でおおよそ1時間ほど聞き取りを行っている点は秋田での調査方法と同じであった。ただし、聞き取り内容がどのような方法で記録されたかは不明である。また、37名の

調査対象者の中で①から④の条件を全て満たす母親は19名だったため、本稿ではこの19名の意見のみを分析する。

岡山での聞き取りも半構造化面接の方法で行われていた。主な質問項目は、①避難を決めた理由②これまでをふりかえって③福島について、どんな想いをもっているか④今、大切にしていること、原発事故を経験して気づいたことや学んだことである。なお、資料には実名が記載されている場合もあるが、聞き取り対象者を特定されることを避けるために、被調査者に関する情報は調査場所(岡山)のみ括弧内に記載する。引用中の括弧内は筆者の注である。また、「②これまでをふりかえって」の中で被調査者らが避難後の生活ぶりや心境を具体的に述べていることが多かったため、秋田での質問項目と共通することがあればそれと対応させながら分析・比較・考察していくことにする。

2. 資料に基づく考察

(1) 岡山県への避難時期

19世帯の避難経歴を概観した最初の印象は、岡山に落ち着くまでに避難場所を転々としている世帯が多いということだ。福島県から岡山県に直行した世帯は6件だけであり、中には母親の実家が岡山県である世帯もあれば全く縁故が無い世帯もあるのだが、2011年3月から2012年12月までの間に避難してきている。一方、避難場所を転々としてきた世帯の避難時期には幅があった。早い世帯は2011年4月に動き、一番遅い世帯は2015年11月である。秋田で調査した5世帯では2012年2月に避難してきた世帯が最後であったことを考えると、2015年11月というのはとても遅く感じる。もしかしたら「2012年12月末で住宅支援が打ち切り」(岡山)になった後に岡山県に避難してくる世帯がある背景には、何らかの根拠があるのではないだろうか。前述の世帯も含め住宅支援打ち切り後に転居してきたケースが6件もあることに疑問を抱いた筆者は、福島県から岡山県への避難状況を調べることにした。

(2) 岡山県への避難状況

復興庁発表「全国の避難者等の数」によれば、東日本大震災に伴う岡山県への避難者数は平成28年9月30日現在で1024人である。注意しておきたいのは、復興庁の「全国の避難者等の数」のデータが不十分であるとする意見があることだ。詳しく述べれば、「震災と原発事故から4年が過ぎたにもかかわらず…(中略)…避難者の定義や集計方法は今も示されないまま、都道府県がそれぞれ独自の集計方法でまとめて報告している」(関西学院大学2015:31)というのだ。だから、もしかしたら正確性に欠けるかもしれないという前提を持つことも忘れてはならないだろう。それでもこのデータを根拠に

して分析を続ければ、同じ中国地方の鳥取県が135人、島根県が72人、広島県が372人、山口県が107人という数字の中で、岡山県の避難者は突出して多い印象を受ける。岡山県の避難者の内訳としては「現在、全避難者の7割以上は関東から来た方です。原発事故の放射能汚染は広範囲に及んだため、関東でも健康被害や不安を感じたり、避難移住を希望されている方が多い現状があります」(大塚2016:46)という言葉通り、福島県発表「福島県から県外への避難状況」が報告する岡山県への避難者数は1024人中271人だけである。一方、全国から秋田県への避難者数は744人であり、そのうち福島県からの避難者数は542人。データからは秋田県の避難者のおよそ7割が福島県から来ていると言えるだろう。その理由としては、前稿の被調査者の話に「ちょっと関西は文化が違いすぎて、あの、生活していける自信がなかったから」(蔭山・佐藤修2016:91)という内容があったように、秋田県は福島県と同じ東北地方に属するので生活する上で安心感があるから福島県出身者が多い、とも推察できる。だとすると、福島県から岡山県へ避難した271人は、どんな考えを持って東北地方から遠く離れた中国地方まで避難したのだろうか。

(3) 岡山県への避難を決めた理由

秋田県の5名の被調査者らの避難のきっかけは「紛れもなく原発事故に伴う放射能災害の影響であった」(蔭山・佐藤修2016:90)が、岡山県の19名の母親も同じであった。それぞれに表現の仕方は異なっていたが、「放射能の子どもへの影響を考えて」(岡山) 避難したことを文献の内容から把握できた。しかし、「子ども達に体調不良が続く」(岡山), 「子ども(当時2歳)の体調が突然悪化した」(岡山), 「家族みんなが体調を崩した」(岡山), 「長男が鼻血を出したりして」(岡山), 「(子どもたちの)止まらない咳や熱, アトピーの悪化, 大量の鼻血」(岡山) という健康被害に関する意見は、秋田の被調査者からはあまり聞かれなかった内容だった。こうした意見を出した被調査者らの世帯は「保養に出ると回復した」(岡山), 「(岡山県) 高梁市に来て1か月たつと体調が驚くほど良くなった」(岡山) と、被災地から距離を置いて生活すると体調が回復することを実感しており、その結果「もっと安全な土地に移りたい」(岡山) という気持ちになっていったようである。岡山県を避難先を選んだ理由は、実家や親戚宅が岡山県だった者もいたが、「支援団体・立地・食品の自給率の高さなど全てが揃っていた」(岡山), 「原発もなく林業もさかんな岡山県を候補に考えた」(岡山), 「簡単には帰れない遠い場所がいいと思って」(岡山), 「2012年3月に福島市で開かれた移住相談会に行った」(岡山), 「交通, 支援団体の充実など, ほどよく便利だった」(岡山), 「岡山には福島からの避

難者が多く, どこか安心感があった」(岡山) と, 各世帯が慎重に吟味した上で決めていたことが分かった。各世帯の証言を裏付けるように, 日本全国の避難者支援をまとめた白書では, 「中国地方の他の四県に比べて, 岡山県内への避難者数は多い。これは, 震災直後, 岡山県が避難者の受け入れ支援を早く表明したこと, 既存の原子力発電所から比較的距離があること, 自然災害が少ないことなどから, 避難先に選ぶ避難者が多くいたためと思われる。あわせて, 民間による支援の立ち上がりが高く, 支援内容も多岐にわたっていた」(関西学院大学2015:158) と述べられている。岡山の被調査者らが避難先を決定するまでに, メディアやインターネットを駆使して自分達で調査を行っていた点は秋田の被調査者らと同じであった。その背景には「国は守ってくれず, 自分で動くしかない」(岡山), 「他の何をおいても, 子どもの未来を大事にして動こう」(岡山), 「何を犠牲にしても命をつなごう」(岡山) と, 「集団でなく個人が自律性を獲得するために避難する」(辰巳2014:206) 強い覚悟があったことが伺えた。

さて, 「もしかしたら『2012年12月末で住宅支援が打ち切り』(岡山) になった後に岡山県に避難してくる世帯がある背景には, 何らかの根拠があるのではないだろうか」という筆者の疑問をさらに追及した結果, 「(岡山県は) 他県と違い, 2012年以降も避難者が増えていることも特徴的だ。その理由としては, 避難者が少しずつ当事者のコミュニティをつくりはじめたことや, 避難元を問わない支援施策(一部地域で行われている保育料の無料措置や, 無償での避難住宅の受け入れの継続)などがあると考えられる。また, 県内市町村の中には2012年ごろから転入者の増加実績や避難者の声をもとに『定住・移住』支援の具体化をはじめたこともあり, 被災地からではなく, 避難先から転居するケースも見られる」(関西学院大学2015:158) という内容が見つかった。実際, 岡山の避難世帯の中には鳥取県から岡山県へ, 高知県から岡山県へ, 山形県から岡山県へと, 避難先から転居しているケースがある。

以上のように, 被調査者らの意見を比較して見えてきた秋田と岡山の避難者の共通点は「原発事故による放射能災害の影響により避難していること」「自分達で調査を行った上で避難先を決めていたこと」である。相違点は, 岡山の避難者からは「放射能災害により実際に健康被害を経験した」という声が多かったことである。さらに, 岡山の避難状況を調べた結果, 「2012年以降も避難者が増えていること」「無償での避難受け入れの継続があること」「定住・移住支援の具体化により他の避難先から転居してくるケースもあること」が岡山県の特徴であり, 秋田県と異なる点であった。

(4) 避難後の子どもの様子

岡山県の被調査者らの子ども達は事故当時、0歳から12歳ぐらいまでの年齢だった。対する秋田県の子ども達は、2歳から小学3年生までの年齢だったため、岡山県の調査の方が思春期に差しかかる子どもの様子も含めてより詳細に把握できるかもしれない。だが、岡山県での調査は「福島と岡山の教育の違い」についての質問は行っていないため、学校教育に関する情報は秋田県よりも乏しい。

資料によれば、当時小学校6年生だった女の子は、原発事故後の早い時期に岡山県に避難したのだが、「2学期が始まると、学校に行けないことが多くなった。ずっと『向こうの学校を卒業したかった』という思いを引きずり、卒業式の涙は悔し涙だった」(岡山) そうだ。しかし、中学校入学と同時に変わり、現在は順調に育っているとのことだ。震災から1年後に母子避難をした世帯は「新生活のスタートは悲惨だった」(岡山)と証言し、当時6歳だった息子のケガ、4歳だった娘の入院・登園拒否と続き、「甲状腺検査では全員にのう胞が見つかりショックを受けた」(岡山)と述べている。だが、「知らない土地で母1人の子育ては大変」(岡山)だが、「いつも友人が助けてくれた」(岡山)とも言っている。事故後半年ほど経ってから家族で岡山に来た世帯では、当時2年生だった男の子が「転校したくない」(岡山)と泣いたが、小学6年生になった現在は少年野球チームに入り生活も落ち着いているようだ。2014年に母子避難をした世帯では、「長男は小6で転校したが、1学年1クラスの小規模校だったので、すぐに馴染むことができた」(岡山) そうだが、保育園に通っている次男が「月に1度主人が1週間ほど滞在して帰るたびに、パパシクになってしまい、今は保育園をやめている」(岡山)とのことである。2012年に母子避難をした世帯では、現在は「地に足のついた生活ができるようになってきたが」(岡山)、福島にいる夫が来ると「子どもが生き活きするのを目の当たりにするたび、『我慢させているな…』と申し訳なく思う」(岡山)と言っている。2012年に家族の反対を押し切って母子避難を決めた世帯では、「(子どもたちが)ときおり元気がない姿を見ると『岡山に連れてきて正解だったのだろうか』と考えることもある」(岡山)と打ち明けている。

一読した際、秋田の子ども達に比べると岡山の子ども達の方が現在の生活に落ち着くまでに多くの苦勞を抱えていたように感じた。しかし、秋田と岡山の調査は母集団の人数も異なり、秋田で調査した世帯がたまたま「自主避難生活がおおむね順調に推移している」(紺野・佐藤修 2014) 世帯だったとも考えられる。また、秋田県に避難した子ども達も「子どもが成長するのに安定した

環境」(蔭山・佐藤修 2016:92)を手放して避難した点は岡山の子ども達と同じであり、調査では把握しきれなかった苦勞が存在していた可能性もある。だから一概に「岡山県に避難した子どもの方が苦勞した」と結論づけることは早計であると言えよう。

(5) 故郷の人々との関係

この項目は「福島について、どんな想いをもっているか」という質問の答えを分析したものである。

「近所に住んでいた人の多くはそのままそこで暮らし続けているので、複雑な気持ち。自分だけ逃げてきたから『みんな大丈夫だろうか?』と心配する気持ちが大きい」(岡山),「家族や親戚は今でも福島に住んでいるのに、自分たちだけ岡山にきて申し訳ないと思う」(岡山),「今も不安を抱えて福島で生活している友人や親戚のことを考えると心が痛む」(岡山)と、故郷の人々を心配したり避難したことに負い目を感じたりしている世帯。「自分の心は福島にいて、体だけ岡山に持ってきてしまった感じ」(岡山),「自分で建てた我が家には年に一度帰っているが、心の一部は今もそこに住み続けている気がする」(岡山),「自分は福島県を、両親を、この実家をとっても愛していたことに気が付いた」(岡山),「大好きだし、帰りたい」(岡山),「大好きなふるさと」(岡山)と福島県での暮らしに愛着を示す世帯。「福島に残る人と県外に出た人の間に意識のズレがあることや、本音が言えないことが一番つらい」(岡山),「友人に『裁判やってる』と話したら、『もう福島のことであまり騒ぎ立てないで』と言われ、意見が合わなくなってしまった」(岡山),「親しい人達との価値観の違いなどから、帰って生活することは難しいと感じている」(岡山),「最近福島は親戚からも、『帰ってこないの?』『もう避難しなくてもいいでしょ』『いつまで岡山にいるの?』などと言われる」(岡山),「福島でのまわりの人の目も気になってしまう。『絆』という言葉も重くてしんどくなる」(岡山)という意見は、秋田の調査で「故郷の人々との軋轢が実際に存在するという証言が得られた」(蔭山・佐藤修 2016:93) ことと一致するだろう。秋田の調査では出てこなかった内容は、「もともと大人しく辛抱強い県民性はあったが、震災後、真実を見ないようにして閉鎖的になっているように感じる」(岡山),「福島情報は得ているが、非難も応援する気持ちはなく、できるだけフラットに受け取るようにしている」(岡山),「そこに暮らす人たちのことを否定する気持ちはまったくない」(岡山),「身体のためには避難した方がよいが、心のためには住み続ける方がよい場合がある」(岡山),「家庭によって様々な事情もあるし、福島に残ることを決めた人の気持ちも分かるようになってきた」と福島に残る人々を冷静に客観視したり、認めたりしていることだ。これは秋田と岡山では質問の仕方

が異なるために差が出た内容かもしれない。しかし、秋田でも別の質問項目では「いろんな人がいて、いろんな考えがあって、それでいいな」(秋田)と話す世帯があったことを考えると、秋田と岡山に共通して「県外に避難したからこそ養うことができた客観的な視点」が存在するとも言えるだろう。

(6) 県や国への要望は何か

「福島について、どんな想いをもっているか」という内容を分析していたところ、秋田県で行った「県や国への要望は何か」に対する答えと類似することが多かったため意見を抽出した。秋田ではあまり話されなかった、放射能による健康被害への対策についての意見が目立ったのが印象的である。具体的には「健康診断は広域避難者にもしっかり続けて欲しい」(岡山)、「福島の中では、放射能が安全だという情報しか伝えられておらず、もどかしい。危険な面もあるはずなのにそこは伏せられていて、その情報の伝えられ方がおかしいと思う」(岡山)、「福島県には、除染よりも安全な食べ物や保養などの政策をお願いしたい」(岡山)、「お金の支援だけではなく、避難という選択を理解してもらうことが必要」(岡山)、「福島県には、除染ではなく、人々の安全のためにお金を使ってほしい。また、放射能が危ないということを認めてもらいたい」(岡山)という内容であった。

(7) 原発事故を経験して気づいたことや学んだこと

「国は信用できない」(岡山)、「テレビで流れていることが信じられなくなり、自分で調べる力がついた」(岡山)、「社会の仕組みには、報道に載らない現実がたくさんあることを知った」(岡山)という、国やメディアが流す情報への不信感。その不信感を乗り越えて「国の政策にもどんどん国民が関心をもって意見していかないといけないし、参加していきたい」(岡山)、「(原発に)頼り切らない自分達らしい暮らしも発信していきたい」(岡山)、「自然を大事にすることを表現したいと思っている」(岡山)と、自分から積極的に社会へ働きかけようとする意見。原発については「2度とこのような(原発)事故を起こしてはいけないし、そのためには原発の再稼働などあってはならない」(岡山)という反原発の内容もあれば、「反原発派と原発推進派の接点を見つけていくことが大事だとわかった。『私たちは正しい!』と思ひ込むことが、分断を生む」(岡山)と、原発事故によって生まれた人々の分断を何とか解消したいという考えもあった。また、「自分らしく生き直しをするきっかけになった」(岡山)、「モノやお金ではなく、自然や家族との時間が何より大事だと思う」(岡山)、「ひとつひとつの出会いが貴重だと気づくことができた。これからもみんなと手を取り合って暮らしていきたい」(岡山)、「避難しなかったら出会わなかった人、体験できなかったこ

とがたくさんある」(岡山)、「原発事故をきっかけに、衣食住を見直すチャンスをいただいた」(岡山)、「生きるために必要なものは大してなくて、生活はもっとシンプルでいい、ということにも気づいた」(岡山)と、次の(8)の項目とも重複する内容が見られた。

(8) 今、大切にしていること

圧倒的に多い意見は「家族との時間」(岡山)に代表されるように、家族や子どもを大切にしたいという内容だった。おそらく原発事故による避難のために家族がバラバラになった経験から実感したことだろうと推察した。次に、避難生活で多くの人に助けられた経験から「人とのつながり」(岡山)を挙げる人々もいた。また、原発事故前は当たり前だった「安心してごはんが食べられ、安心して眠れること」(岡山)を挙げたり、放射能汚染に苦しんだ経験から「外で自然遊びができることを大切にしたい」(岡山)と述べたりする世帯もあった。それから困難な避難生活を過ごした末に「自分に、ていねいになること。祈ること」(岡山)、「祈ること、楽しい時間を過ごすこと、なるべく丁寧に生活すること」(岡山)、「新しい1年1年を大切にしていきたい」(岡山)と、自分の暮らし方を見つめ直す意見もあった。最後に、前向きに新生活を送りたい気持ちから「自分の仕事がきちんとできるようになること」(岡山)という意見や、「これまで何とかやれたから、これからもやっていける。いま、とてもいい方向に向かっている」(岡山)と今後に希望を抱いている内容も見られた。

おわりに：結論的考察と今後の課題

秋田の被調査者らが故郷もしくは近隣県への移動を考えるようになったのは、子どもの進学タイミング、故郷に残した家族の病気、父親の仕事の関係、時間の経過に伴う放射線量の軽減、放射能に対する自分の意識の変化、自分や家族の行く末に対する懸念などであったが、このまま秋田県への定住を希望する世帯もあった。検討の結果、避難元や近隣県への移住を終えた世帯の子どもは、時折秋田を恋しがる子もいるが、その地域の学校に馴染み、友達もできて順調に生活していることが明らかになった。秋田県で放射能を気にせずに過ごせた影響もあってか、その地域でも自然に親しみを持って生活しているようだ。学習に関しては秋田県の丁寧に徹底した指導ぶりを懐かしむ声が親の方から聞かれた。また、帰還または移住後もその地域での人間関係が良好であることが分かった。その背景には帰還や移住を決断するまでの葛藤を家族で乗り越えたこと、周囲に頼れる肉親や知人がいること、子どもの順応がスムーズであったこと、周囲への気遣いを含めた母親の行動傾向があることが明らかになった。避難生活を通して感じていることは、避難

を終了した世帯からは今後の生活の見通しが立って心が軽くなったという意見が主だった。まだ避難を継続している世帯からは、前向きに考えられるようになった、子ども達が協力してくれるようになった、いいこともいっぱいあった、人によって多様な考え方があることが分かったなどの意見があった。

岡山での調査を分析し、秋田の被調査者らの意見と比較して見えてきた秋田と岡山の避難者の共通点は「原発事故による放射能災害の影響により避難していること」「自分達で調査を行った上で避難先を決めていたこと」であった。相違点は、岡山の避難者からは「放射能災害により実際に健康被害を経験した」声が多かったことだ。さらに、岡山の避難状況を調べた結果、「2012年以降も避難者が増えていること」「無償での避難受け入れの継続があること」「定住・移住支援の具体化により他の避難先から転居してくるケースもあること」が岡山県の特徴であり、秋田県と異なる点であった。また、子ども達の様子については、秋田の子ども達に比べると岡山の子ども達の方が現在の生活に落ち着くまでに多くの苦労を抱えていたように感じた。しかし、秋田と岡山の調査は母集団の人数も異なり、秋田の調査では把握しきれなかった意見が岡山では抽出できた可能性もあるため、一概に共通点と相違点を述べることはできなかった。次に、故郷の人との関係については、秋田と岡山に共通して「故郷の人々との軋轢が実際に存在すること」が明らかになった。秋田の調査では出なかった内容は「福島に残る人々を冷静に客観視したり、認めたりしている」点だが、秋田と岡山では質問の仕方が異なるために差が出たとも考えられる。しかし、秋田と岡山に共通して「県外に避難したからこそ養うことができた客観的な視点」が存在していた。県や国への要望については、岡山では「放射能による健康被害への対策」が秋田に比べて目立った。避難生活を通して感じていることについては、質問項目が秋田と岡山で異なるため意見は多岐にわたっていたが、両者から「避難生活が悪いことばかりではなかったこと」「自分の考え方や生き方、暮らし方を見直すきっかけになったこと」が共通して挙げられた。ただ、秋田でも岡山でも、今も苦悩を抱えている世帯があることは見過ごせないだろう。

前稿では、秋田での調査を通じ、人々が想定外の出来事にどのように対処するのか、そしてどのような経過をたどるのかについて、教育科学者としてできるだけ正確に記録して後世へ伝えることを今後の課題とした。そして今回、秋田と岡山の調査内容を比較検討する中でこの課題への取り組みを続行することの大切さに改めて気づいた。筆者は岡山県に避難した世帯の声を分析する中で「結局、事故がなければ…と思う」(岡山)、「なぜこうなっ

たのかと理不尽で悔しい気持ちは込み上げてくる」(岡山)、「原発さえなければ、平和に暮らしていただろう、と残念な気持ちでならない」(岡山)、「汚染がなかったら…」(岡山)、「原発事故さえ起きなければ…」(岡山)という被調査者らの悔しい思いに触れた。こうした悔しさは同じ質問項目で調査すれば秋田の被調査者らからも聞き取れた可能性があるだろうし、秋田と岡山以外に避難した世帯も故郷にそのまま残って生活している世帯も同じ思いをしているかもしれない。だとすると、福島県はもちろん日本各地に散らばっている原発事故被害者の声を集めて比較・検討・考察することで、原発事故に対する日本独自の教訓が見えてくるかもしれないだろう。発生から30年近く経つチェルノブイリ原発事故から分かっている原発事故の特徴は、「被害の『広域性』(一つの地域におさまらない)」「『長期性』(数十年・次世代に及ぶ)」「『未確定性』(事故の影響について確実に分からない)」(馬場・尾松 2016:28) だという。では、福島原発事故の場合ほどどのように特徴づけられるようになり、後世への教訓として何が伝えられていくのだろうか。事故から5年半が経過したが、未解明なことばかりで現在進行中の災害である。教育科学者の一人として今後も目の前にある事実を丁寧に分析し続けていく決意である。

【引用参考文献】

- 大塚愛(2016)『福島から岡山へ 原発事故から5年目のいま』子ども未来・愛ネットワーク
- 開沼博(2015)『はじめての福島学』イースト・プレス
- 蔭山佐智子・佐藤修司(2016)「東日本大震災および原発事故による福島県外への避難の実態(Ⅲ):避難継続世帯と避難終了世帯への聞き取り調査を通して」秋田大学教育文化学部『秋田大学教育文化学部研究紀要』教育科学, 第71集, 87-96
- 関西学院大学災害復興制度研究所東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN)福島子どもたちを守る法律家ネットワーク(SAFLAN)(2015)『原発避難白書』人文書院
- 紺野祐・佐藤修司(2014)「東日本大震災および原発事故による福島県外への避難の実態(Ⅰ):母子避難者へのインタビュー調査を中心に」秋田大学教育文化学部『秋田大学教育文化学部研究紀要』教育科学, 第69集, 145-157
- 紺野祐(2015)「東日本大震災および原発事故による福島県外への避難の実態(Ⅱ):母子による自主避難を支える父親」『東北学院大学教養学部論集』第170巻
- 佐藤修司(2013)「岩手・宮城・福島における教育復興と教育行政・学校」教育科学研究会編『講座・教育実践と教育学の再生:第5巻:3.11と教育改革』かもがわ出版
- 辰巳頼子(2014)「避難が生み出す平和:原発事故からの母子避難者が形成する新たなつながり」小田博志・関雄二編『平和の人類学』2014 法律文化社 187-209
- 成元哲編著・牛島佳代・松谷満・坂口祐介(2015)『終わらない被災の時間 原発事故が福島県中通りの親子に与える影

東日本大震災および原発事故による福島県外への避難の実態 (IV)

響』石風社
馬場朝子・尾松亮 (2016) 『原発事故 国家はどう責任を負ったか ウクライナとチェルノブイリ法』東洋書店新社
日野行介 (2016) 『原発棄民 フクシマ5年後の真実』毎日新聞出版
ふくしまの今とつながる相談室 toiro (2015) 『Color 2015』
森松明希子 (2013) 『母子避難, 心の軌跡: 家族で訴訟を決意するまで』かもがわ出版
山中茂樹 (2010) 『いま考えたい災害からの暮らし再生』岩波書店
山根純佳 (2013) 「原発事故による『母子避難』問題とその支援: 山形県における避難者調査のデータから」山形大学人文学部『山形大学人文学部研究年報』第10号, 37-51
「全国の避難者等の数」参照日: 2016年10月28日, 参照先: 復興庁公式Webサイト
<http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/hinanshasuu.html>

「福島県から県外への避難状況」参照日: 2016年10月28日, 参照先: 福島県公式Webサイト
<http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/184676.pdf>

【付記】

本研究にあたり, 調査にご協力いただいた秋田県の避難者およびそのご家族の方々に感謝いたします。また, 岡山県で調査を実施し意見を集約した関係者の方々に敬意を表するとともに, 岡山県の避難者およびそのご家族の方々にも感謝いたします。本研究は, 日本学術振興会の科学研究費補助金「東日本大震災における教育行政機関・職員の機能と実態に関する研究」(平成24年～26年度), 「東日本大震災後の教育復興の進展と復興教育プログラムに関する研究」(平成27年～29年度)を受けた成果となっています。